

確かな願いをもち、創造力を育む図画工作・美術科学習
－思考の多様性の中で感性豊かな表現を追求する－

1 図画工作・美術科における子どもに備えさせたい資質・能力

次の文章は、5年生が昨年度1学期に取り組んだ題材、「水の中の世界をのぞいてみたら」8時間目における学習活動後の日記である。

今日、図工では紙皿の絵のつづきをしました。わたしは、はく力のイメージを表したかったのですが、はく力を出すにはどうすればいいか考えてみました。すると、わたしは、一つはく力が出るためのコツが分かりました。それは、小魚を、ふちにもあふれ出すようにかくことです。ふちにも小魚をかかなかつたら、水そうに閉じこめられた感じがするので、外へ外へと飛び出して、あふれていく感じで絵をかきました。今日完成した部分を見たら、しっかりとはく力感が出ていて、友だちにも何を表したいのかがちゃんと伝わっていたし、今日見に来られたお客さんも、「わあ、はく力があってすごいねえ。」とほめてもらうことができたので、よかったです。(児童A)

児童Aは、表したいことと表現方法を照らし合わせながら、見直しを踏まえた上で、よりふさわしい表し方を見付け出している。

図画工作・美術科における造形表現活動の中で、この例に見られる豊かな学びの姿を願う時、子どもが確かな願いをもち、創造力を育むために備えさせたい資質・能力の重点を次のように考えた。

- 題材を越えて、学んできた知識や技能を活用する「創造力」
- 表現テーマに向かって願いをもち、自己の造形表現を高める「自己実現力」
- 体験や他者との交流から表したいことを発展的に見出す「問題解決能力」

自分の考えの価値やよさを抛り所としたり、他者と共有した価値やよさに基づいたりして、自分の造形表現を問い直すことで豊かな造形表現を創造することができる。そのためには、一人一人の子どもが、表したい事柄について確かな願いをもつこと。その上で、自己の造形表現の目的を達成するために、感性を働かせて自分や他者の造形表現や表現意図に問いかけを行うことが大切である。

図画工作・美術科において、子どもが追求する姿とは、見いだしたことや過去の経験や技能を駆使しながら、目的を達成するために新たな表現を問題解決的に獲得しようとする姿であると考えられる。

自分の取組のよさを認め、他者から表現のよさを認められる中で、達成感を味わい、自己実現を図ることができる。

2 資質・能力を育むために

図画工作・美術科の授業の中で、子どもが感性豊かな表現を追求する時、子どもが、その時々に応じた学習動機をしっかりともつことが大切になると考える。学習場面の中で子どもが素材や表現テーマについて素朴な気付きをもち、素直な興味をもつ瞬間はたくさん見られる。しかし、自己の造形表現を追求するようになるまで、子どもの気付きの質を高めたり、学習動機にまで興味を高めたりする必要がある。図画工作・美術科で備えさせたい資質・能力は、造形表現に向かう子どもの学習動機を支えると同時に、子ども自身にとって明らかになった学習動機、すなわち、確かな願いによって支えられ育まれていくと考える。

そこで、次のように資質・能力を育むための手立てを考えた。

- 造形表現の可能性を広げるために素材、技法などを吟味したり、表現テーマや表現意図に合致しているかなどについて検証したりできるように、新たな視点を示す。
- 子どもの造形表現への願いを確かなものにするために、子どもの必要感に応じた「掘り下げる」「提案する」など教師のはたらきかけを行い、考えの根拠や理由を明らかにする。
- 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させるために、学び合いの視点や論点を明確にする。

子どもの追求意欲を支えることの一つに、子どもが自らの学びを自覚することが考えられる。子どもは、自分が表したいと考えていることについて漠然としたイメージを出発点としていることが多い。表現・鑑賞の領域を問わず、素材や技法と向き合ったり、発想や構想を図や絵、言葉に表したりすることで、イメージを具体化・具現化する過程をたどる。よりよい表現方法や発想を引き出すために、自分が表したいと考えていることを自分自身が明確につかむことが大切である。また、自分が表したいと考えていたことは本当にこれでよいのかなど、見直しを図ることが大切である。ふりかえりの機会を有効に働かせながら、自らの学びを自覚することが子どもの高い意欲を保ち、追求意欲を支えることにつながると思われる。

学びの自覚をうながす前提として、造形表現への願いを確かにすることが大切であると考える。そのためには、子どもが表したいと考えていることについての発想や、その考えのもとになった根拠や理由を、子どもとともに明らかにしていく必要がある。図画工作の製作活動や美術科の制作活動の中では、考えていることが多少漠然としていても、作品としての形を成すことがあるため、“浅い”追求となってしまう。子どもが確かな願いをもつことで、自分の造形表現としっかりと表現意図をもって向き合うことができるので、子どもが必要感をもって追求し続けることが可能になると考える。

学び合いの場面では、自らの考え（個人思考）と集団の考え（集団思考）をつなぐことにより、取組や表現のよさや価値が共有され、表したいと考えていたことがより明確になったり、新たな可能性が示されたりする。そこには子どもの問いがあり、よりよいものを求める願いがある。教師は、子どもの問いを刺激し、話し合いをゆさぶる共通の視点を示すためのはたらきかけを行うことができる（図1）。

題材の設定や単元の構成にあたっては、学び合うための意図的な場面を設定することで、他者の経験を追体験し、新たな気づきを獲得することが期待できる。

授業の中で教師のはたらきかけが有効に機能したり、授業そのものを見直し改善したりするために、子どもの姿を具体的な視点をもって教師がとらえるようにしたい。その視点は、教師が子どもの学びの姿や追求の様子をより深くとらえるためのものであり、子どもの考えが生まれる根拠や理由を明らかにするものである。（文責 三桐 撰夫）

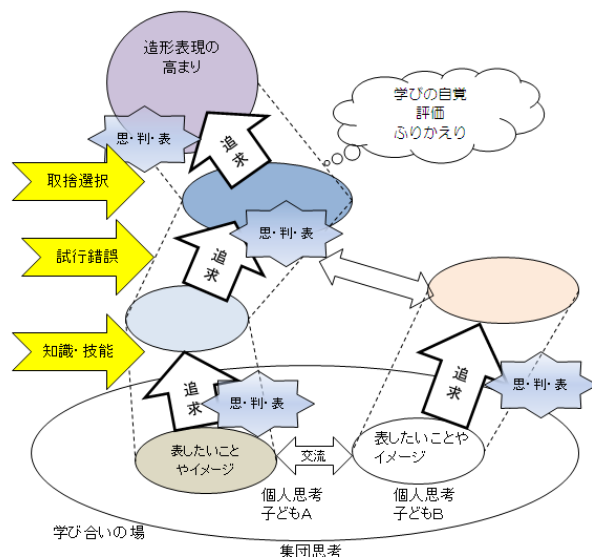


図1：学び合いの場モデル